

〔研究ノート〕

カール・ヤスパースにおける教育の問題

笠井 恵 二

要 旨

本稿は、ヤスパースが教育の問題について、いかなる考えをもっていたのかを考察しようとするものである。

ヤスパースには全く特別な宗派的な信仰というものがなかったし、そのようなものを克服する必要も感じなかった。しかし彼の両親は自然の美しさや滋味あふれる精神的な作品に触れさせつつ、子供たちを厳しく教育した。彼はギムナジウムのように、病気によって普通の人になしうる活気溢れる生活の大部分を奪われてしまったが、愛と信頼に貫かれた家庭で成長し、両親が示してくれた確固とした人生肯定によって、豊かな精神を育むことができた。

ヤスパースによれば、人間は他人と共にあることによって、初めて自己というものに到達するのであって、決して独力でそうなるのではない。教えるということは、学ぶ者に綿密な態度を養わせ、思考を訓練し、方法を教え、理解の仕方を伝えることにより、光を求める止み難い熱情を鼓舞させることである。生徒は熟練を身につけ、知識を習得しなければならない。生徒にとって大切なのは、高い直観や形態をもった青少年らしい精神の充実である。教育においては、知るに値しないものが満ちている。教育においては、科学的思惟の仕方そのものが強制的なもろもろの根柢をもって知る能力の意識的経験となるのである。科学的教授の計画は、科学そのものにより、専門諸科学の専門的知識によって、決定的に規定されることのできるものではない。それは全く他の専門的知識の、すなわち本質的なことに関する知の法廷のもとに根源的に立っている。生徒たちは、その素質と能力に応じて教育されるべきなのである。

教育については、到るところで熟慮し計画することができるのであるが、それ以上に大切なことは、このような計画の限界を洞察することであり、また、良心的にその限界を守ることである。学校という共同体によって、強力に高められた教師の人格性における指導的法廷から、すべての衝動、力、悦びというものが生ずるのである。

ヤスパースによれば大学の課題は、研究者と生徒という共同体のなかで、真理を探究することにある。大学は、教会の理念と同様に、不滅な、超国家的・世界的な性格をもった理念から自己の生命を得るのであり、国家はこれに自由を認めるのである。大学は、制限を加えようとする外部ないし内部からの要求や命令に拘束されることなく、真理を教授するものでなければならない。

大学は一種の学校であるが、しかし独自の学校であり、大学では、生徒は授業をうけるだけでなく研究にも参加する。こうして生徒は、自分の生活を規定する学問的教養に到達しなければならない。本来、生徒は独立かつ自己責任的な、そして教師に批判的についてゆく思考者であるべきである。そして生徒は学習することの自由をもっているのである。

大学とは、そこで国家と社会が時代の最も明瞭な自覚を展開する場所である。そこでは、真理を得ることのみを目的とする人々が、教師と生徒として出会う。無条件の真理探究がどこかで行われるということは、人間の本来の要求なのである。

国家と社会における勢力は、大学のために心を配る。なぜなら大学において、学問的能力と精神的教養を必要とする国家的職業を遂行するための基礎が習得されるからである。そして大学を修了した人々の精神的な教養によってこそ、真理の探究が、それらの職業の遂行に望ましい結果をもたらす。もしそのことが疑われたとしても、人間の基本的な意志は、どのような代価をはらっても徹底的な真理探究を敢行しようとするのである。

教育は、民族の歴史的生活の形態と共に変化する。教育の単位は、教会・身分・国民等の社会の単位によって与えられる。教育は、それらの特別の社会的な形態が、世代を通じて自己を維持してゆく方法である。だから、社会的変革と共に教育も変化し、革新の試みは最初に教育問題に向かう。このため、教育の意味と手段についての考察は、自然に国家や社会に及んでいくのである。

目次

- 1、哲学的自伝より
- 2、教育的計画の限界
- 3、大学の理念

1、「哲学的自伝」より

本稿は、二十世紀ドイツの実存哲学者カール・ヤスパース（1883年－1969年）が、教育の問題について、いかなる考えをもっていたのかを考察しようとするものである。まず彼の自伝を見ることによって、人間の成長ということに関して彼がいかなる考えをもっていたかを見てみよう。（注1）

この自伝によるとヤスパースは少年時代には、キリスト教の教会とは余り関わりをもたなかった。学校では宗教教育、聖書物語、信仰問答書、教会史などの授業があり、いろいろな観念が心に植えつけられた。このような観念は、直ちになんらかの影響をおよぼすというようなものではなかったが、記憶の中にはとどまった。堅信礼の時期がきたとき、それは特別に宗教的に強調されることもなく、しきたりとして実行され、世俗的な贈り物がもらえる祭りの日として扱われた。彼にとっては、堅信礼の前の宗教教育は冗談事であり滑稽なものだった。彼の両親も教会というものを無視していた。

ギムナジウムの最上級生のとき、堅信礼は数年前に形式的に済ませていたのであるが、自分に誠実であるためには、教会を脱会すべきだと彼は考え、この気持ちを父親に伝えた。それに対して父親は、勿論好きなようにして構わないと答えた。しかし若い息子には、自分が計画していることの意味がまだ分かっていない。人間はこの世にひとりでは生きていくわけではなく共同責任というものがあり、個人が単独で自分の道を歩いていくわけにはいかない。人間が秩序を守っていくとするなら、他の人々と一緒に生きていかなければならない。そしてある種の秩序は、宗教のお陰であることを否定することはできない。宗教を破壊したりすれば、予想も

できないほどの悪が氾濫してくるのである。他のすべての制度と同様に、教会も多くの虚偽と結びついているということを父親は否定はしない。それは息子の考えているとおりでらう。しかし人間は、70歳の歳にでもなれば、考えは変わってくるだろう。だから死ぬ前になって、つまりもはや世の中で働けなくなったときに、教会を脱退して懸案を一掃してもいいのではなからうか。このように父親は若い息子に対して語ったのである。

ヤスパースには全く特別な宗派的な信仰というものがなかったし、そのようなものを克服する必要も感じなかった。キルケゴールは、なぜ信仰するのかという問いに対して、父親がそれを教えてくれたからであると答えたが、ヤスパースの父親は全く別なことを教えたのである。誰も彼に祈ることを教えなかった。しかし彼の両親は、畏敬の念を懐きつつ、誠実を旨としてひとときも気を弛めぬ勤勉さをもって、自然の美しさや滋味あふれる精神的な作品に触れさせつつ、子供たちを厳しく教育した。両親は子供たちを、ひとつの充実した世界の中で生長させたのである。

そしてヤスパース独自の「哲学的信仰」というものは、成長したはるか後になってようやく完全に自覚されるに至るのである。ところでヤスパースに初めて信仰の問題を真剣に突きつけたのは、彼の妻だった。ヤスパース夫人のゲルトルートは、正統的ユダヤ教の深い信仰を、聖書に基礎づけられた「哲学すること」へと成長させていた聡明な女性だった。彼女の生活の隅々にまで、宗教的畏敬の念が行きわたっていた。あらゆる宗教的なものに対して彼女は敬意を払った。ゲルトルートが家に来てからクリスマスがいっそうキリスト教的になった、と父親が言うようになった。彼女は幼いときからユダヤの預言者たちの精神の息吹にふれて成長し、教義も戒律ももたないながらも揺るぎのない倫理的無制約性に導かれていた。ヤスパースは、自分が彼女と志を同じくする者であることを感じた。そして悟性のヴェールのもとで確かに活動はしているが、しかしあくまで姿を見せないものを、はっきりと自覚しようと促がされたのである。

「自分の精神的発展をふりかえてみますと、私は子供のときから少しも変わらぬままのものを見る思いがいたすのであります。青年時代の基調は、人生の過程をへるうちにはっきりとなり、世界知の材料の点で豊富とはなりましたが、しかしそれは決して、信念の変化、断層、危機、再生も起こさなかったのであります。私の人生における唯一の大きな転換は、妻と私が互いに結んだ同盟、すなわち結婚でありました。この同盟において、それ以前の基調は強固にされ、無限に拡張されたのです。私は両親の家で身につけたものを土台にして生きたのであります。のちに獲得したあらゆる知をもって私は、以前のものへ光を当てたのは当然で、その結果それを充分自覚したのであります」。(注2)

第二次世界大戦の嵐が吹きまくっていた時、妻がユダヤ系であったので、ヤスパースと妻の人生は、絶えず脅威にさらされていた。この脅威は、彼らの個人としての将来を希望のないものに思わせた。戦争中、自分たちの命がもはやないものとあきらめていた彼らにとっては、戦争が終わり、危険が過ぎ去ったとき、命がもう一度与えられたように思われたのである。しか

しこのような世界的な破局も、彼らが魂の最も深いものにふれることを妨げることはできなかった。この戦争は多くの動揺をもたらしたはしたが、同時に、すでに存在したものがいっそう明瞭に自覚される新たな実例を提供したのである。

このものが何であるかは、ただ自分の全著作を通じてのみ語る事ができるとヤスパースは言う。またこれの遠因が、少年時代のはっきりした経験にどの程度まで帰せられうるのかは定かではない。彼は早くもギムナジウムの生徒のときに、他の人々からは局外者の立場に立つことを余儀なくさせられた。病気によって、普通の人がなしうる活気溢れる生活の大部分が奪われてしまったのである。しかし、理性的に物事を考え、愛と信頼に貫かれた家庭で成長できたこと、両親が示してくれた確固とした人生肯定、一生を通じての妹との気持ちの一致、父方の家庭と母方の家庭における保守的・自由主義的かつ野党的で、貴族制を介しての民主主義的傾向の立場、これらのことが後のヤスパースに影響しているのである。

若い日々を回顧してヤスパースは言う。「……私が追憶しうる限りでは、私の心を強く動かし経験は、他人とお互いに了解し合ったり、了解し合えなかったときのそれであります。生徒のときすでに私は、何か論争のおこなわれた後は、世間並みのお愛想でもいわぬ限りは、気分が元通りによくはならぬのではなからうか、と気をもんだものでした。私は気性の烈しい、闘争的な男でありましたが、それというのも、私が明確さを求めるに急であったからであります。真実の解明が、たとえば教師などの権威によって禁ぜられ、絶対命令で問題に終止符が打たれた場合には、私はいじめられている気がいたしたものです。しかし私は、なおそれ以上のことを望みました。すなわち、両親、きょうだい、友人たちがいたにもかかわらず私は、あらゆる誤解、あらゆる単なる一時的なもの、あまりにも自明なものの限界をことごとくに踏み越えたひとつの交わりにあこがれて煩悶しておりました」。(注3)

ヤスパースによれば、人間は他人と共にあることによって、初めて自己というものに到達するのであって、決して知によって独力でそうなるのではない。われわれは、他者が彼自身となることに応じて、それだけわれわれ自身となるのである。他者が自由であるかぎりにおいて、われわれもやっと自由になることができる。だから彼にとっては、生徒の時から、人間と人間との交わりの問題は、初めのうちは生きることの実際の問題であったが、のちには哲学的に熟慮された根本問題となった。結局のところあらゆる思想は、それが交わりを促進するものなのか、それとも阻害するものなのか、という問いに直面させられるのである。「要するに真理そのものが、真理とはわれわれを結びつけるものであるという基準下に、そしてまた、真理の価値を、真理によって可能となる結びつきの真理で測ろうという要求下におかれるのが当然でした。妻とともににはじめて私は、愛しながらの闘争の道、生涯にわたって続けられるが決して完結されない、腹藏のない、従って尽きることのない交わりの道に達したのであります。このような方向のいずれにおいても、私は終わりに達しておらないのであります」。(注4)

1953年、第2次世界大戦が終わって8年後、70歳のときに書いたこの『哲学的自伝』の最

後のところでヤスパースは言う。自分がこれまで書いてきたものの大部分は、大学の教師として講義したものであった。しかし、自分が教育的意図から講義しようと思ったときでも、決して計画通りに実現されたことはなかった。教えるということは、学ぶ者に綿密な態度を養わせ、思考を訓練し、方法を教え、理解の仕方を伝えることにより、光を求める止み難い熱情を鼓舞させることである。ヤスパースは個人に干渉するようなことはしなかったが、彼らが永遠の秩序のきびしさを感じるように仕向けた。寛容の中には厳しい要求が秘められており、この要求は、各個人によって感知されるのである。

以上で明らかになったように、ヤスパースの人間としての成長には、誠実かつ厳格な両親と敬虔なユダヤ教の信仰篤き妻の影響が強くあったといえることができる。

2、教育的計画の限界

次にわれわれはこの自伝の1年前、1952年の「バーゼル大学新聞」に書かれた「教育的計画の限界について」を見てみよう。ここでヤスパースは、自由世界において教育がどのように形成されるべきかということ、全体主義的世界からは本質的に区別されると言う。自由世界は、それがそれとして生きている限りにおいて、一つの根拠から生きる。そのような根拠は、歴史的に生きられるのであり、そして生徒における日々の現在によって覚醒される。しかしそれ自身は全体としては計画もされなければつくられることもしない。何が計画されるか何が計画されないかについて明らかにすることや、そして計画はされないがしかし無限に開明されるべきものの力についての意識をもって生きること、このようなことは自由世界にとっては、容易に解決することのできない課題となったのである。誤った計画により、またすべてを担う根拠を忘却することにより、ひとびとは、全体主義的なものにおいて終わる道に、しらずに陥ってしまうこともある。絶えることのない計画というものも大切である。計画そのものに対してではなく、このような計画の誤った精神に対して、そして捉えることのできないものを一緒にその計画のなかに取り入れるところの或る種の計画に対する防御は必要である。このことに関してヤスパースは、例をあげて説明する。

「生徒たちは熟練を身につけなければならないし、知識を習得しなければならない。知識は純粋な形では諸科学によって役立てられる。したがって、青少年に対しては、諸科学の内容ともろもろの方法とが、それらが人生にとって役に立つものとして現れる限り、次つぎと与えられるように、計画される」。(注5) 歴史は、教師によって批判的な歴史科学の上に基礎づけられるだけではなく、また科学として講義される。古代語と自国語は、語学上の知識をもって成し遂げられ、聖書の教授は宗教史となる。しかし生徒にとって大切なのはこのような科学ではなく、高い直観や形態をもった青少年らしい精神の充実である。だから大切なのは、このような内実の伝達にさいしての簡潔さであり、その歴史的構造の明瞭さである。そのことは、始め

には精神的過程であるが、後になって精神的過程は一部分は科学的過程ともなる。職業としての科学においては、知るに値しないものは何も存在しない。しかし教育においては、知るに値しないものが満ちている。教育においては、科学的思惟の仕方そのものが、強制的なまろもろの根柢をもって知る能力の意識的経験となるのである。その際、科学的思惟方法は、人間存在において欠くことのできない基礎として有効なものとされるが、それは科学的思惟方法の限界に関する知をもつ場合にそうなのである。科学的教授の計画は、科学そのものにより、また専門諸科学の専門的知識によって決定的に規定されることのできるものではない。それは全く他の専門的知識の、すなわち本質的なことに関する知の法廷のもとに根源的に立っている。科学的な授業の計画は、科学的正確性とは違った他の責任に基づいている。このような法廷において学校における科学の役割が、特に知るに値するものの選択が、学校の精神によって常に新たに検討されなければならない。(注6)

つぎに生徒たちは、その素質と能力に応じて教育されるべきであるとヤスパースは言う。「人間本性や精神—物理的諸機能や発展の諸段階やまろもろの異常性に対する科学としての心理学は、教育的計画やまろもろの決定の基礎であるべきである。教育は心理学的実行の一つとなる。研究者としての人間は実在としての人間を洞見しうる、という考えが生ずるのである。すなわち、人間から成りうるそして成るべきところのものは、心理学的認識によって明らかになるのである。こういう考えは一個の宿命的な現代の誤謬である」。(注7) たしかに心理学を研究することは意味深いことである。そこにおいては、疲労の問題、記憶の問題、発展段階の諸特質等の問題において、合目的に応用しうる多くの認識が獲得されている。精神病理学的知識は、多くの不必要な苦悩を阻止し、多くの早急な判断を訂正することができる。一方ではまろもろの希望を維持することができるし、他方ではどうにもならない無情なものを承認することを教えることができる。心理学は徹底的にさまざまな欠陥に対して助言者となる。心理学は今日、さまざまな検査やその他の方法で、企業や学校において摩擦を緩和し、外見上のさまざまな業績を高めることに成功した。心理学と精神病理学は、その可能性の限界が意識的に問題とされたときには、その分相応の範囲においては役に立つ。しかし法廷としての心理学者というものは、一種の怪奇な現象と言わざるを得ない。アメリカにおいて、全体として科学的な衣服を纏った一種の信仰運動というべき精神分析がさかんであるが、この現象はヤスパースにとっては、マルクス主義的思惟方法による人間の変化と並んで、人間の品位を絶滅させる一つの様式であるように思われたのである。このようなことから、憶測的な心理学に基づく教育の計画に反して、現実的な心理学的洞察が指示されるべきであるとヤスパースは考える。科学としての心理学は、教育にとっては決定的なものではない。心理学なくしても、教育においてあらゆる本質的なものは保持されるのである。

ヤスパースによれば教育については、到るところで熟慮し計画することができるのであるが、それ以上に大切なことは、このような計画の限界を洞察することであり、また、良心的にその

限界を守ることである。計画の上に立つ法廷は、それ自身では計画されえないものである。このような法廷は、現実的に存在するか、それとも現実的に存在しないかのどちらかである。このような法廷が、今日においてもなお存在しているということの上に、ひとびとがいただくもろもろの希望が基づいている。しかしこのような法廷は、業績や時間数や教科案の外面的な具体性のなかに現実的に存在しているわけではない。決定的なことは、教室において教育しているひとりひとりの教師が、自己の責任に対して自由であるときに生ずるのである。そこでは、官僚式の計画や規則による取締りや学校教育の大家たちが恐れるところの現実的な生活が行われるのである。そこでは、精神的なさまじまの内実に対する責任と博愛とが一致する。ここにおいていかなる計画がなされようとも、根源的現実の空間が依然として存在し続けるのである。計画者がこの現実を考慮するとき、彼はこの現実を妨げないように努力することができる。このような現実が存在しているか否かということ、無意識のうちに生徒たちは知るのである。

さらにヤスパースは言う。「学校という心術の共同体によって強力に高められた、教師の人格性における指導的法廷から、すべての衝動、力および悦びが生ずるのである。かかる法廷は、学校の範囲を超えて、学校によっていっしょに制約されて、すべての個々の人間において語るものである。かかる法廷は、自らの人倫的根拠によりまた歴史の力の諸状況における自らの幸運により、自らの生命の現実を守護したところの、もろもろの民族の歴史性のなかで語るのである」。(注8) ひとびとは、このような法廷にふれることができるのであり、それが微やかに語るときには、それを鼓舞することができる。このような法廷が発言するところでは、日常は灰色のものではなくなり、そこでは最も小さな行為も忘れえぬものとして精神に受け入れられる。そこでは、読み書き計算する学習は、技術的な能力を獲得するというものみに止まるものではなく、最初から精神に参与することを意味する。

計画と知識が、包括的な指導のもとでの手段である代わりに、それ自身が目的となるとき、教育は調教となり、人間は機能へと変えられ、人間の可能的飛翔は、単なる生命のエネルギーの状態へと変化してしまう。この単なる生命のエネルギーの状態というものは、全体主義的なものにおいてはじめてその意味が理解され完成されるところの、一個の過程なのであるとヤスパースは言う。

3、大学の理念

最後にわれわれは、ヤスパースが1945年5月、すなわちナチスが連合軍に無条件降伏した月に書いた『大学の理念』を見てみよう。彼は、大戦で破壊され尽くしたドイツの復興を願いつつ、大学の使命について深い思索を展開している。

ヤスパースによれば大学の課題は、研究者と生徒という共同体のなかで、真理を探究することにあること、大学は一つの自治する団体である。「大学が寄付により、旧来の資産により、

また国家によって、その存立の手段を得ようとも、或いは法王の教書、皇帝に認可、地方国家の法律のいずれの条件のもとにおいても、大学は一つの自治団体である。それらいずれの条件のもとにおいても、大学は自分の生活を独立に営むことができる。大学の設立者たちがそれを望んでいるからである。或いは設立者たちがそれを許容するかぎり、大学は独自の生活を営むことができる」。(注9) 大学は、教会の理念と同様に、不滅な、超国家的・世界的な性格をもった理念から自己の生命を得るのであり、国家はこれに自由を認めるのである。大学は教授の自由を要求し、またこれが保証されている。大学は、制限を加えようとする外部ないし内部からの要求や命令に拘束されることなく、真理を教授するものでなければならない。

またヤスパースによれば大学は、一種の学校であるがしかし独自の学校である。大学では、生徒は授業をうけるだけでなく研究にも参加する。こうして生徒は、自分の生活を規定する学問的教養に到達しなければならない。本来、生徒は独立かつ自己責任的な、そして教師に批判的についてゆく思考者であるべきである。そして生徒は学習することの自由をもっているのである。

大学とは、そこで国家と社会が時代の最も明瞭な自覚を展開する場所である。そこでは、真理を得ることのみを目的とする人々が、教師と生徒として出会う。無条件の真理探究がどこかで行われるということは、人間の本来の要求なのである。

国家と社会における勢力は、大学のために心を配る。なぜなら大学において、学問的能力と精神的教養を必要とする国家的職業を遂行するための基礎が習得されるからである。そして大学を修了した人々の精神的な教養によってこそ、真理の探究が、それらの職業の遂行に望ましい結果をもたらす。もしそのことが疑われたとしても、人間の基本的な意志は、どのような代価をはらっても徹底的な真理探究を敢行しようとするのである。なぜなら、徹底的な真理探究のみが、存在を経験する中で到達可能な高さにまで、人間を高めることを可能とさせるからである。

大学では、根源的知識欲というものが自己を実現することをヤスパースは強調する。根源的知識欲は、「何を認識できるか」、また「認識によってわれわれがどうなるか」ということをつきとめようとする以外の目的をもっていない。知ることの喜びは、見ることに於いて、思想の方法性において、また客観性への教育としての自己批判において、体験される。根源的知識欲は一つでありつつ、全体をめざす。根源的知識欲は常に特殊のなかでのみ、即ちそれぞれの専門の仕事のなかで実現されるが、それらの専門は、一つの全体の一部であることによってその精神的生命を保つのである。

大学は学問に奉仕するものであるが、学問は包括的な精神的な生活の一部であることによってその意味をもつものであり、この精神的な生活こそが、大学における本来的な運動なのである。

大学の課題は学問にあるが、このことについてヤスパースは次のようなことを語る。

1、学問の研究と教授は、真理の啓示としての精神的な生活の教養に奉仕する。そのため大学

の課題は、研究と、教授と、教養（教育）の三つである。これら三つの課題は別々に論じられたとしても、そこには分けることのできない統一が見られる。

- 2、それらの課題の達成は、思考する人々の交わりと結びついている。この交わりは、研究者同士、教師と生徒、生徒同士、およびこれらの人々相互の間でなされる。
- 3、大学の課題は制度のわく内で実現される。制度は大学の存立条件を構成しつつ、その作業形式と管理形式を構成する。
- 4、学問は意味のうえで一つの全体である。それぞれの学問は別々に発生し、常に離れ離れになるものではあるが、しかしそれらは、「諸学問の宇宙」の中でふたたび互いに求め合うのである。大学は学問の総体を表わす意味をもつような仕方組織される。

学生は、学問を学び職業の準備をするために大学に入る。学生の課題と彼らのおかれる状況は明瞭であるが、学生はしばしば途方にくれる。まず、学習されるものの量が学生を圧倒する。最初学生は、何が自分にとって一番大切なことなのか分からず、講義と演習のなかで自分の行き方を見出して行かなければならない。

しかし学生は、それ以上のことを大学に期待している。学生は一つの専門を勉強し、また或る職業を念頭においているわけであるが、大学は学生の目に伝統的栄光に輝くものとして映じ、学問の全体を表わしているように見える。学生はこの全体に対して畏れを抱き、この全体を少しでも感じ、一つの根拠ある世界観を見出そうと期待している。「真理への道が開かれるはずだ」、「世界と人生が明らかになって行くはずだ」、そして「全体が一つの無限な秩序——即ち一つの宇宙として示されるはずだ」と学生は期待している。

また若い人間は、人生が彼自身の決断の余地をまだ多く残しているので、人生を真面目に考える。青年は自分が可能性に充ちていると感じており、自分が今後どうなるのかということの大半は自分次第だと考えている。彼は自分の将来が、毎日の生き方に、また一時間一時間に、そして自分の心のあらゆる動きに懸かっていると感じている。

さらに研究と教授の結合は、大学が放棄することのできない原則であることをヤスパースは指摘する。最良の研究者が理念上同時に唯一の善き教師である。もしも研究者が教授法に巧みでなく、学習素材の伝達が下手であったとしても、研究者のみが、学生を認識作用の本来の過程、すなわち学問の精神にふれさせることができるからである。彼こそは、それ自身が生きた学問であり、学生は彼との交渉において学問の根源的面目を直観するのである。彼は生徒のなかに自分の衝動と同じ衝動をよびさまし、学問の源泉へと連れて行くのである。教師においても学生においても、自ら研究する者のみが本質的に学習することができるのである。自ら研究しない教師は、固定したことを伝達し、教授法的に順序立てるに過ぎないのである。

さらに大学では、さまざまな職業に対する専門的な訓練がおこなわれるとヤスパースは言う。大学が準備するこれらの職業は、人間によってその理念が実現され、学問性をその基礎とする職業である。それらの職業の基礎には、専門的な職業への育成を開始する前に研究と方法へ学

生を手引きすることが必要である。それらの特殊な職業に向けての最上の育成は、完結した知識の習得ではなくて、学問的思考への修練、科学的思考に向けての諸器官の発展である。それによってこそ、後々まで精神的学問的育成をすすめていくことが可能となる。大学は職業の育成に対しては、基礎を与えうのみで、仕上げは実地で行われる。大学では、実地での完成のための最良の条件が備えられていなければならない。それには問いの方法を練習することが必要である。またその専門のどこかで、究極の根底に達していなくてはならない。しかし専門上の結果というものを全部暗記しておく必要はない。たとえ全て暗記したとしても、それは一時の幻想にしかすぎない。そのようなことは、試験がすめば忘れてしまう。「大事なのは、学習内容を持っているということではなくて、判断力である。(出来上がった)知識ではなく、自分の創意によって必要な知識を創造する能力、ものごとを諸々の観点のもとで思想的につかみ、また問うことのできる能力こそが、ちからになるのである。ところでこのような能力は、知識素材の習得によって得られるものでなく、生きた研究との接触によって得られるのである」。(注10) しかしだからといって、技術的な事柄や教授法的な順序によって教えられるべき素材が学習されなくてもよいということではない。しかしこれらは、学生自身が書物で勉強すればよいことである。大学での理論的な勉学においては、後年の実地にとっても有意義な素材を出来るだけ多く身につけておくことは意味のあることには違いないが、むしろ生き活きと運動する精神、問題の把握と問題設定、方法のマスターの方が、はるかに大切なのであるとヤスパースは言う。

教育は、民族の歴史的生活の形態と共に変化する。教育の単位は、教会・身分・国民等の社会の単位によって与えられる。教育は、それらの特別の社会的な形態が、世代を通じて自己を維持して行く方法である。だから社会的変革と共に教育も変化し、革新の試みは最初に教育問題に向かう。だから教育の意味と手段についての考察は、自然に国家や社会に及んでいく。

ヤスパースは教育は次の3つの側面を持つと言う。

- 1、授業の内容は、その時々々の社会の要求によって選択される。今日では社会学的、技術的、自然科学的、地理的な知識に重点がおかれる。
- 2、教育は教養の理想と共に変化する。
- 3、学校制度は、社会の構造の縮図である。今日では、あらゆる民主主義が、万人に共通な教育を要求している。平等な教育ほど人間を平等にするものはないからである。

授業の形式としては、昔からいちばんよく行われているのは講義という形式であるとヤスパースは言う。講義では、学習可能な知識と、それを習得し根拠づける方法が、聞き手に生き活きと理解できるように提示される。聞き手はメモをとり、講義されることから追求し、また読書や経験によって講義への準備をしたり、学習したことをあとで掘げるといような課題があたえられている。

どんな講義の仕方が正しいかについての尺度を決めることはできない。「よい講義は、それ

それ、真似のできない独特のかたちをもっている。講義の基本的意味は、教師の態度によって全くちがっているが、それでもつねに価値をもっている。教授法的に聴手に焦点を合わせ、聴手を内から引きつける講義も可能だし、いきた研究を独語的に究明し、そのさい教師は殆ど聴手のことを念頭においていないのに、聴手はなまの研究に一時的に参加しているような気持ちをおこす、といったそういう講義も可能である」。(注11) 概論のような或る学問の全貌を示す講義は、もし同時に一つ一つの部分が決定的・根本的によく練り上げられているばあいには、全体を見ようとする気持ちを聞き手にひき起こすものである。このような講義は、自分が生涯をささげた研究の成果を、そこで開陳する老練な教師のしごとである。だから大学では、学問の基礎的な部門は、最も卓越した教授による主要講義として、そのつど一つの全体として講ぜられるべきである。

このようなヤスパースの言葉に接して、きっと彼自身もそのような講義をやっていたのだろうなと思った。私は、ヤスパースがこの世を去ってから3年後の1972年から5年半にわたって彼が教鞭をとっていたバーゼル大学で学ぶ幸いを得たのであるが、当時は彼の後継者のロスマン教授がヤスパースの哲学について講義をしていた。

このヤスパースの言うような忘れることのできない、比類なき個性的な講義に接した想いでここに記しておきたい。それは京都大学文学部哲学科で数年に亘って聴講した武内義範教授と辻村公一教授の講義である。若いときの私が、真の哲人というべきお二人の講義をじかに聴くことが出来たことは、私の一生の宝と言っていいと思う。お二人とも余り多くの著書は書かれなかったが、その毎回の講義にそれこそ命をかけて懸けておられたということが、毎回ひしひしと感じられた。それは単に知識を伝達し、記憶させるような授業ではなかった。われわれは、教授と共に思索し、哲学したのである。そこで流れた密度の深い体験を文字で表すことはとうていできない。また、内容がどのようなものであったのかも、説明しろと言われてもうまく言い表すことはできない。しかし、単にその内容を記憶していると言うこと以上に、そのとき、先生と共に思索し哲学していた若いときの私が、今のわたしの土台を形成していると感じるのである。このようなことを考えると、ソクラテスが一行も文章も残さないで、そのおりおりに出会った人々との出会いの瞬間をかけがえのないものとしていたということの深い意味がよく分かる。私も、そのような真剣な命を懸けた講義をやらなければならないのである。

辻村先生は、いつも謹厳かつ厳格な態度で講義をなさり、デモーニッシュとでも表現したら適切かと思われるような鬼気迫る講義をなされた。とくに先生が、ご自身が愛弟子と自認されたハイデggerについての講義は凄かった。また武内先生の講義は、本当に独特のスタイルでなされた。一冊のノートもメモもなしに、90分の間、教壇の上を行ったり来たりしながら、湧き上がる豊かな発想に自由に流されながら語り続けられた。あるとき、私の青山の恩師が京都に来たので、武内先生にお目にかかりたいとお願いしたら、明日は講義の準備があるので、

残念ですがお会いできませんと言われて、先生は講義のために大変な準備をなさっておられることが分かった。

私は先生方の講義を、気が散らないようにいつも一番前の座席で聴講することになっていたが、詰襟の学生服を着た坊主頭の学生がいて、いつも彼と、先に来て一番前の席をとる競争をしていたことを思い出す。京都の学生時代の懐かしい思い出である。

さらにヤスパースは続ける。

最近講義に対していろいろと批判がくわえられ、聞き手を受動的にする一方的な話しにすぎないとか、果たして聞く者がそれを理解し身につけたかどうか疑わしいとか、講義される内容は書物による方がより善くより速く学習できるとか、いろいろなことが言われてきた。しかしこのような意見は、固定的な知識を繰り返すだけの講義や、単なる饒舌から無計画に発せられる悪い講義に対してのみ当て嵌まる。その講義が、教師の生涯の課題であり、入念に準備され、しかも活き活きとした精神的生命から発する繰り返すことのできないやり方で行われるものであれば、その講義は深い価値をもっているのである。

すぐれた研究者の講義の思い出は、生涯ひとの心に残るものであり、言葉どおりに筆記されて印刷されても、その講義録は力のない残骸にすぎないものである。講義において重要な事柄は、つねに内容と密接に結びついている。講義という状況は、教師自身の内にも、講義においてでなければいつまでも隠されていたかも知れないものを生み出すのである。

確かにヤスパースの言うように私も講義をしているときに、その緊張した時間において新しい発見をすることはしばしばである。何年も繰り返してやっている同じ内容の講義においてさえも、講義の時間中に新しい発見をすることはまれではない。また学生の質問から、新しい発想をえることは毎日のように経験していることである。

さらにヤスパースによれば、教師は自己の思考、真面目さ、問い、感動などにおいて、意図せずして自分を示し、学生を本当に自分の精神的内面に引き込むのである。しかしこの高邁な理念は、それが目的とされるなら失われてしまい、そこには気取り、美辞麗句、悲愴、技巧、人気取り、扇動、無恥が現れてしまう。どうすればよい講義ができるかというような定められた方法はない。ものごとを真剣に考え、講義を職務の頂点として全責任を実行し、その他の点では術策を弄しない、ということに尽きる。カントからマックス・ウエーバーにいたるすぐれた講義においては、どもったり言いあやまったり、下手な声の出し方などさえも、その講義の深い印象を妨げることはできなかった。講義録などからは、実際の講義の二番煎じの知識が得られるにすぎないのである。

このヤスパースの教育に関する意見から、考えさせられ教えられることは多い。われわれも、常に襟を正して、学生との出会いを掛け替えのないものとして、真剣かつ誠実に講義を全うしていかなければならないと思うのである。

注

- (1) カール・ヤスパース『哲学的自伝』

本書は、発表されたのは1957年であったが、実際に執筆されたのはヤスパースが70歳のときの1953年であった。

- (2) ヤスパース『『哲学的自伝』、重田英世訳、ヤスパース選集14、理想社、1965、p.160

- (3) 上掲書、p.162

- (4) 上掲書、p.163

- (5) ヤスパース「教育的計画の限界について」、『哲学と世界』、齋藤武雄訳、ヤスパース選集24、p.35

- (6) ここでヤスパースが用いている「法廷」という言葉は、もちろん法律的な意味ではなく、全てのことを判断する基準というような意味合いで用いられているわけである。

- (7) 上掲書、p.36

- (8) 上掲書、p.44

- (9) ヤスパース『大学の理念』、森 昭訳、ヤスパース選集2、p.13

- (10) 上掲書、p.94

- (11) 上掲書、p.112

